

〈研究ノート〉

絵本にみる子どもの権利

田谷 幸子

Abstract

子どもの権利（障害、ジェンダー、LGBT¹などを含む）にかかわる絵本を、絵本の検索サイトや国際子ども図書館、つくば国際短期大学図書館を利用してリスト化し、閲覧を行った。1970年から2023年までに360冊あった。1995年～2002年、2018年～2022年に出版数が増加する状況にあり、前者は障害やジェンダーにかかわる絵本、後者は子どもの人権やLGBTにかかわる絵本が多く出版される傾向にあった。「児童の権利に関する条約」にかかわる絵本は、「児童の権利に関する条約」が国連で採択された1989年前後よりも、国連採択30周年に当たる2019年前後に多く出版されている。子どもの権利にかかわる絵本は、海外で出版された絵本の翻訳から始まり、子どもの権利の思想や考えが日本において普及するようになってから、日本の絵本作家によって創作される傾向があった。

Keywords : 絵本、子どもの権利、ジェンダー、LGBT

1. はじめに

1989年に国連総会にて児童の権利に関する条約が採択されてから30年以上が経過している。しかし、大学の児童福祉関連科目において、学生に「児童の権利条約って知っていますか?」「子どもの権利って何だと思いますか?」と質問すると、おおよそ教室にいる半分の学生が「知っている」に手を挙げてくれる。さらに、「その内容まで知っていますか?」と質問すると、そのうちの3分の1程度の学生が手を挙げ続けている状況である。この状況は、セーブ・ザ・チルドレンが2021年に行った「子どもの権利に関する意識」調査²において、「Q. 子どもの権利条約を知っていますか?」の回答で、「聞いたことがない」が子どもで31.5%、大人で42.9%と重なる状況にあり、子どもの権利についての啓発活動が必要な状況にある。小学校、中学校においては、CAPプログラム³が行われているが、すべての学校で行われているわけではなく、また、多くの学校で1学年に対して年1回の講座である。子どもの権利について、子どもと大人が日常的に知る（学ぶ）ことができるツールとして本、乳幼児については絵本が有効であると考え、絵本の中で子どもの権利がどのように描かれているかを検討することとした。

2. 絵本の効果

絵本は、子どもの本というイメージがあるが、松本⁴によると、古代エジプトの「死者の書」以来、キリスト教世界では中世に時禱書が、中国では5世紀ごろ画卷が、日本では平安時代に絵巻物、江戸時代に絵本が発展しており、これらは大人の書物であったが、20世紀に入り、ヨーロッパで子どもの人格が認められると社会の中で教育の重要性が注目され、絵本は事物を言葉と図像で同時に表すことができるため、子どもの教育に有効なツールと

して急速に普及していったという経緯がある。現在、絵本は「子どものための」絵本というイメージがあるのは、この20世紀以降の子どもの教育のためという位置づけによるところが大きい。現在も、絵本の教育的効果は重要視され、乳幼児への読み聞かせが保育所や幼稚園、認定こども園、家庭において積極的に行われている。このような観点から、子どもの権利を子どもに伝えるにあたり、絵本がそのツールとして有効であると考えた。

環境から子どもが受ける影響として、様々な媒体がある。テレビやゲーム、インターネットなどは多くの情報を子どもに与え、その影響はとても大きい。乳幼児の場合は、保護者や保育者によって、これらの情報媒体は積極的に取り入れられることは少なく、情報媒体として推奨されているものには絵本が多い。近年は電子絵本も導入されつつあるが、間合いの取り方が難しい、ページをめくる瞬間の表現が難しいといった理由で、紙である絵本が読み聞かせにおいては支持されている。そのため、子ども、特に乳幼児は子どもの権利やジェンダーなどの価値観を絵本から得ることができ、絵本における子どもの権利やジェンダーの語られ方や描かれ方が子どもに大きな影響を与え得ると言える。

絵本のよさは文字（あるいは文章）と絵が組み合わせられており、文字によって絵本の内容が漠然としかつかめなくても、絵によって認識できる文字と絵の相互作用にある。松居直は、「目は字から読むことのためにあるのではなく、見えるものをしっかりつかむ、つまり認知することがまず大切です。そうした対象になるものの一つが絵です。絵本の絵をしっかりと見つめ、そこに語られている物語を読みとる力を持つ目を育てることは、幼児期の教育目標の一つです」⁵としている。保育所などにおける5領域において、絵本は、心と体、人や物とのかかわりには相互な密接なかかわりがあること、特に、人間関係では、「他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」とあり、身近な生活が描かれた絵本や自らの発達に適した絵本を選ぶことが、子どもたちが自らの生活を作り出す力の基礎となるとされている。また、絵本の読みきかせは、子どもは絵本を読んでもらっているだけと思われがちであるが、生駒は「実は絵本の世界を楽しむ、物語を読み解くことは主体的な営みと言える。子どもの表情を見ていると、心の中では主人公になりきって喜怒哀楽を感じているように見える」⁶とし、かけがえのない体験であるとしている。乳幼児の生活世界はまだまだ限られた世界であるが、絵本を通して新しい世界を体験し、他者と出会い、さまざまなことを想像することができる。絵本を通して、子どもたちの世界を広げることが可能であるからこそ、選書をする大人の価値が重要となる。そのため、子どもの権利に関わる絵本を読み聞かせることは、絵本の世界を新たな世界として子どもが受け入れ、楽しむことで、大人も子どもが楽しむ世界を受け入れ、大人自身も絵本の世界を肯定的に受け止めていく可能性を持っていると言える。

このように、絵本は、子どもの教育に有効なツールであり、かつ、子どもが主体的にかかわっていくものであるため、新しい世界や新しい価値に子どもが触れ受け入れていけるものであると言える。また、同時に、子どもが新たな価値や世界を受け入れる様子を、絵本の読み聞かせを行う保護者や、保育士や幼稚園教諭といった養育者もまた受け入れていく効果があると考えられる。

3. 調査方法

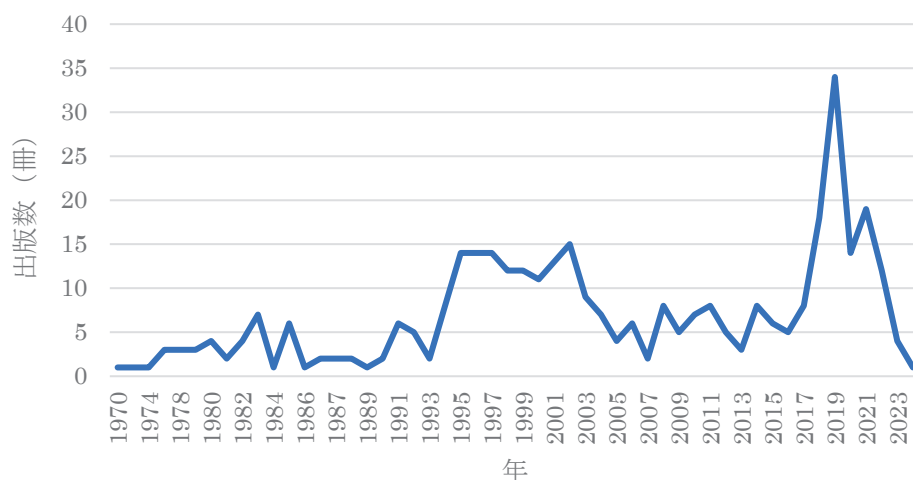
子どもの権利やジェンダーという社会問題を扱った絵本はどれくらいあるのか、どのよ

うなテーマを扱っているのか、社会問題をどのように描いているのかについて調べた。第1段階として、検索サイトを利用し、「絵本ナビ」⁷、「pictbook」⁸、「子どもの本」⁹において、子どもの権利、ジェンダー、LGBTといった子どもの人権にかかわるキーワード検索を行い、第2段階として、国際子ども図書館及びつくば国際短期大学図書館を訪問し、実際に、絵本を手に取り、読み、内容の確認を行った。実際に読んだ絵本は360冊である。キーワード検索で検出された絵本のリストに基づき、2図書館で絵本を読んだことに加えて、図書館で新たに見つけた絵本もリストに加えているが、子どもの権利やジェンダーにかかわる絵本はその他にもある可能性は高い。

4. 考察

子どもの権利（障害、ジェンダー、LGBTなど人権にかかわるテーマを含む）にかかわると紹介されている絵本は1970年から2023年までに360冊あった。1995年から2002年までは年間14冊から15冊程度の出版がなされており、2018年から2022年にかけて18冊から34冊程度の出版があった。2023年度については2023年8月までの書籍となるため、4冊であった。子どもの権利にかかわる絵本の出版状況は表1のとおりである。1995年から2002年においては、障害のある子どもを主人公としたものが多くあり、障害のある子どもが自分の障害について悩みながらも懸命に生きる様子と周りの子どもたちが障害のある子どもを受け入れていく過程を描いた絵本のほか、働く母親、世界の人権をテーマとした絵本が多く見られた。2018年から2022年にかけては、子どもの権利やLGBTをテーマとした絵本が多く、「わたしはわたしでいい」と自分を認め、自己主張をしていく（意見表明をしていく）絵本が多く見られた。また、シリーズ化したものも多くあり、子どもの人権や性など意図がはっきりとした絵本で、絵本作家だけでなく、産婦人科医や研究者などその分野の専門家と言われる人々が普及・啓発のツールとして絵本という方法を採用したものも見られた。

表1. 子どもの権利をテーマとした絵本の出版状況



子どもの権利を題材とした絵本として紹介されている絵本の中で最も古い絵本は、『かたあしだちょうのエルフ』¹⁰（1970年出版）である。だちょうのエルフが子どもたちを守るために猛獣と戦い、一本の木になったという話で、「子どもを守る」というエルフの思いが伝わってくる絵本である。1970年代は、そのほかに『ぼくを探しに』¹¹や『ぞうのエルマー』¹²などが出版されており、「本当の自分」を探したり、「ありのままの自分」を受け入れるといったテーマの絵本が出版されている。『ぼくを探しに』は、まるがかけた自分のかけらを探しにいくお話であり、『続 ぼくを探しに ビッグ・オーとの出会い』¹³と合わせて、自分とは何かを考えさせる絵本である。『ぞうのエルマー』は、みんなちがっていいということを表した絵本で、パッチワークのぞうのエルマーは他のぞうと同じ色に体を染めるが、いたずら好きであることからエルマーだとわかってしまう。その日を「エルマーの日」として、みんなでいろいろな色で飾る日とした。ととったぞうがエルマーに「みんなと おなじふりしたって すぐ ふざけるから、エルマーだって わかってしまうんだ」という。色の違いではなく、エルマーの性格が大切だと本質を伝えている。いずれも名作と言われ、現在も読み聞かせによく使われている絵本である。

1980年代は、「国際障害者年」（1981年）や「国連・障害者の10年」（1983年～1992年）など障害者福祉に関する施策が推進されていることが絵本の出版にも反映されており、障害にかかわる絵本が多く出版されている。『ぼく 耳がきこえないんだ』¹⁴は、難聴児が聞こえないことで友達から疎外される悲しさや不安、そして、耳が聞こえないことを友達が理解し、口話法で会話できたときの喜びを伝えている。『だれが わたしたちをわかってくれるの』¹⁵は、心身障害児の姉妹の写真を掲載し、障害の説明や保育所での様子を描き、障害とは何かを理解することや人間性を問いかけている。内容としては大人へのメッセージが強いが、写真を見ながら障害のある姉妹がひたむきに生きている様子を感じ取ることができる。『ぎざみみのうさぎ』¹⁶は、蛇に噛みつかれて耳がギザギザになった子ウサギが天敵のたくさんいる森の中で懸命に生きる話であり、『さっちゃんのみほうのて』¹⁷は、先天性四肢障害のあるさっちゃんが5本の指のない右手を「みほうのて」と言って受け入れていく話であり、障害のある子どもが厳しい環境の中で懸命に生きていく様子と障害のある子どもを受け入れていく環境との相互作用を描いている。1985年に女子差別撤廃条約批准と男女雇用機会均等法制定等、男女共同参画に向けた国際推進体制の整備が図られると、女性が働くことをテーマとした絵本が出版されている。『ママもおつとめ』¹⁸や『おかあさんはしごとちゅう』¹⁹、『お母さんなんでや』²⁰等、女性が働くことの意味を問い、男女平等意識をはぐくむ意図をもった絵本が登場している。

1991年の湾岸戦争や2003年のイラク戦争の時期には、『かさをささないシランさん』では、傘をささないという他の人と異なる行動をただで逮捕されるという理不尽な世界の状況を描き出した絵本を国際人権団体アムネスティ・インターナショナルが作成したり、武力で平和は決して生まれないという思いから、絵本作家103名が参加し、『世界中の子どもたちが103』²¹という絵本も出版されたり、戦争や非人道的行為について子ども向けに絵本が出版されている。このように、時代背景を反映した絵本が1980年代は多く出版されている。

一方で、1989年に国連総会にて「児童の権利に関する条約」が採択され、1994年に日本がこの条約を批准しているが、1989年から1994年の間に、子どもの権利をテーマとし

た絵本は出版されていない。1996年に『子どものけんり「子どもの権利条約」子ども語訳』²²が出版され、「児童の権利に関する条約」をわかりやすい文章とイラストで紹介をしているものが最初となる。「児童の権利に関する条約」を紹介する絵本が複数出版されている。代表的なものとして、『はじめまして、子どもの権利条約』²³ (2017年)、『ビジュアル版 子どもの権利宣言』²⁴ (2018年)、『世界人権宣言の絵本 みんなたいせつ』²⁵ (2018年)、『子どもの権利ってなあに?』²⁶ (2020年)などがある。出版年から推測すると、2016年に児童福祉法が改正され、第1条に「すべて児童は、児童の権利に関する条約の精神にのっとり(略)その心身の健やかな成長及び発達(略)を等しく保障される権利を有する」と定められ、「児童の権利に関する条約」の精神が児童福祉法の理念となったことや2019年が「児童の権利に関する条約」採択30周年であることを反映していると考えることができる。『はじめまして、子どもの権利条約』は、スウェーデンの「子どもの権利条約」普及啓発テキストに使用されていたイラストを採用しており、イラストを見て、何が描かれているか、子どもが置かれている状況を想像し、それから、条文内容を文章で理解するという形式をとり、イラストから子どもの権利を理解するという手法がとられている。同様に『ビジュアル版 子どもの権利宣言』も、「児童の権利に関する条約」の条文を現代アーティストがイラストに表し、視覚から条文を理解する形式をとっている。『子どもの権利ってなあに?』もイラストで条文を理解する手法を取るほか、「児童の権利に関する条約」の条文をそのまま掲載するのではなく、子どもが実感できるように、子どもに身近な言葉で描かれている。例えば「子どもでも、よくきく薬で治療をうける権利がある。病気がなおったり、走ったり、ジャンプしたり、階段をのぼったり、大声をあげたりできるようになる」、「子どもには、自由にものを言う権利がある。お父さんやお母さんが喜ぶことじゃなくても、思うことを素直に言っている」、「子どもの権利は今この瞬間にだいじにされる必要がある。だって子どもはまさに今、子どもなんだから。」とあり、最後に、「いつになったら世界のすべての子どもの権利がだいじにされるようになるのかな? あした? あさって? 20年後?」と語りかけ、子どもには権利があること、そしてそれがいまだ十分ではない現実を伝え、自分はどうかと子どもに考えさせている。『世界人権宣言の絵本 みんなたいせつ』は、世界各地の子どもたちの写真を子どもの権利条約の条文とともに掲載し、いろいろな子どもたちが世界にいることを気づかせてくれる絵本となっている。

子どもの権利をテーマとした絵本は、レイフ・クリスチャンソンの絵本²⁷が『あなたへ』シリーズで1995年から2001年にかけて15冊出版されており、自分は大切であること、他者を受け入れること、自分の性にとらわれていないことなどをそれぞれテーマとしている。この時期には、子どもの権利をテーマとした海外の絵本が翻訳出版されている。例えば、『あなたがうまれたひ』²⁸、『ぼくはいろいろしってるよ』²⁹、『いつだってともだち』³⁰といった、自分は自分でよいという自己存在の価値をテーマとしたものや、子どもの権利に関する各テーマを『心のなやみにこたえます』(全8巻)³¹のシリーズで出版された絵本や、『とにかくさげんでにげるんだ』³²といった誘拐や性被害から自分の身を守る方法を実例で伝える絵本が出版されている。2001年からは、日本の作者による子どもの権利をテーマとした絵本が出版され始めている。『さっちゃんとなっちゃん』³³や『ともだちや』³⁴をはじめとする内田麟太郎の絵本シリーズ³⁵などがある。

1999年に「男女共同参画社会基本法」が制定され、ジェンダー思考が取り上げられるようになり、2001年に「配偶者暴力防止法」が成立し、男女間による性差別問題が顕在化すると、ジェンダーをテーマとした絵本が海外の翻訳絵本及び日本の絵本が同時期に出版されている。草谷は『ジェンダー・フリーってなあに?』（全3巻）³⁶を出版している。翻訳絵本では『パパとママのたからもの』³⁷や『おんぶはこりごり』³⁸など男女の在り方を問い直し、男の子でも女の子でも愛される権利があることを伝える絵本などが出版されている。

日本において、高度経済成長期までに性別役割分業が機能的に働いたことで、夫は家族のために働き給料を入れ、妻は家事・育児を行い、家事と育児に責任を持つことで夫婦関係が維持される状況がみられた。この当時は、夫婦関係の基盤は「役割」にあったが、愛情を夫婦関係の基盤と考えるようになると、コミュニケーションをとることが中心となっていったとされている。男女平等意識は広がっていき、「男女共同参画社会に関する世論調査」（内閣府）の、「『夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである』という考え方について」で、1979年には「賛成」「どちらかといえば賛成」が72.6%であったが、調査を経るごとにその数値は減少し、2004年には45.2%となり、「どちらかといえば反対」「反対」が48.9%と逆転している³⁹。しかし、男女平等意識と実際の家事時間には大きな隔たりがあり、今なお、女性に家事と育児が大きくのしかかっている状況にある。このような中で、ジェンダーを題材とした絵本に子どもが触れることは、家庭における男女モデルを変化させる契機となる。

日本において、「父親の育児参加」が取り上げられるようになったのは1980年代半ばであり、1990年代には父親と母親のパートナーシップによる育児が取り上げられるようになってきた。これは、社会におけるジェンダー平等への関心が1980年代に高まってきたことや、男女雇用機会均等法の制定（1985年）、育児休業法の施行（1992年）、男女共同参画社会基本法の成立（1999年）と政策動向においてもジェンダー平等の視点が台頭してきたこととも関係している。しかし、先ほど述べたように、男女平等意識と実際の家事時間には大きな隔たりがあり、男性においても男女平等意識を持ちながらも、実際には家事や育児に関われない現実には陥っている。これを天童は、「『父親の育児参加』という呼びかけの実践（言説実践）は、個人を呼びかけに応えさせることで『主体』に変える。『主体化』された個人は、自らのもつ自由な主体という観念を、自身の物質的な実践の行為のなかに刻み込んでいく。とはいえ、『父親の育児参加』に自ら応えようにもそれを現実化するだけの時間、職場環境、家族以外の社会システムの整備が十分ではなく、父親の葛藤は『個人化』される」⁴⁰とし、「再生産戦略の個人化の加速」としてペアレントクラシーが起きているとしている。先ほど述べたように、「男女共同参画社会に関する世論調査」（内閣府）の2004年調査では、「『夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである』という考え方について」の「どちらかといえば反対」「反対」が48.9%と逆転し、2000年代には子育て支援施策が拡充し、ジェンダー平等となるための法制度が整備されているからこそ、子どもたちにはそれを当たり前と思う環境が整えられていると捉え、ジェンダーを題材とする絵本に意識的に触れてもらうことがジェンダー平等を当たり前とする社会の実現となると考える。

しかし、一方で、いまだに男女のステレオタイプで描かれている絵本が多くある。NPO法人SEANの報告書「絵本100冊読んで見えてきたもの」⁴¹（2003年）によると、母親が

エプロンをつけて料理をしている、父親は座って新聞を読んでいるといった描かれ方をした絵本は多くあり、女性は将来、家事をするものだというイメージが植え付けられてしまうのではないかというジェンダーの視点での問題点が指摘されている。そのような意味では、先ほど紹介した『おんぶはこりごり』は、原著では“PIGGYBOOK”⁴²で、1986年にイギリスで出版され、日本では2005年に翻訳出版されている。この本の最後に「ママはしあわせでした。」「ママだって、車のしゅうりができるのよ。」と書かれている。この絵本の前半部分のイラストは、ママがいつも下を向いており表情が描かれていない。そして、家出した後は、家の壁に掛けてあった絵から女性の姿が切り取られ消えており、ママが家に帰ってきてからはママが前を向いて描かれている。絵本の文章には書かれていないが、女性が強い立場から立ち上がり、自分らしくあろうとする様子が描かれている。訳者はあとがきで「囚われのママは狭い枠の中で始ろうとつむいて描かれていますが、自由になると枠が取り払われ、生き生きとした表情になっています。」と絵本の挿絵の説明をしている。このような絵本を手にとってもらう方法として、『保育者と学生・親のための乳児の絵本・保育課題絵本ガイド』⁴³といった絵本のガイドブックが有効である。『保育者と学生・親のための乳児の絵本・保育課題絵本ガイド』⁴⁴では、「おかあさん・おとうさん」に関する絵本について、「おかあさん・おとうさん」が子どもにとって自分をまるごと受け止めてくれるあるいは安心できる存在として描かれた絵本を紹介しており、「コラム私の勧める課題絵本」において、佐々木⁴⁵は『おんぶはこりごり』⁴⁶を紹介している。「おかあさん・おとうさん」に関する絵本の紹介の中で『おんぶはこりごり』は方向性が異なるものであるが、コラムに掲載されることで保育者や親が興味を持ち、子どもに読み聞かせることにつながる可能性がある。そのため、新たな考えや価値にかかわる絵本は、積極的に紹介し進めていく必要がある。

ジェンダーにおいて重要なことは、「自分」として生きられる社会であることであり、自分の存在をそのまま否定されることもなく制限されることもなく生きられる社会であると考え、これはジェンダーだけでなく、LGBTの課題や子どもの権利の課題にも共通するものであるといえる。

2008年からは、LGBTに関する絵本が多く出版され始め、『タンタンタンゴはパパふたり』⁴⁷、『ピンクがすきってきめないで』⁴⁸といった海外の翻訳絵本が出版されている。LGBTをテーマとした絵本は近年増加傾向にあるが、海外の翻訳絵本が大半を占めている。例えば、『王さまと王さま』⁴⁹、『くまのトーマスはおんなのこ』⁵⁰、『ふたりのパパとヴァイオレット』⁵¹、『マチルダとふたりのパパ』⁵²、『ランスとロットのさがしもの』⁵³、『ふたりママの家で』⁵⁴、『くまのトーマスはおんなのこ』⁵⁵、『せかいでさいしょにズボンをはいた女の子』⁵⁶などがある。日本の絵本では、近年出版され始め、『とりかえっこ はっぴょうかい』⁵⁷や『だがし屋のおっちゃんはおばちゃんなのか?』⁵⁸、『性とからだの絵本』シリーズ⁵⁹等がある。

女の子の自由について描いた、『せかいでさいしょにズボンをはいた女の子』は、世界で最初にズボンをはいたメアリー・エドワーズ・ウォーカーのお話である。「むかし むかし（といっても、うんとむかしじゃなくて、ちょっと むかし）、女の子はズボンをはいちゃ いけなかった。 そんなことって、かんがえられる？」と語りかけるところから始めている。男の子の服を着ていると非難する大人に「わたしは わたしのふくを き

ているのよ！」と伝え、教室に入るとほかの女の子もズボンをはいていた。そして、みんな楽しく遊ぶ様子が描かれている。いまではおかしいことが、昔はそうではなかったことを知ることによって、今もあるおかしいを考えることができる。『ジュリアンはマーメイド』⁶⁰は、男の子のジュリアンがマーメイドにあこがれ、マーメイドの格好をして楽しんでいるところを祖母を見つけ、ネックレスをプレゼントしてくれマーメイドパレードに参加する。祖母に見つかった時は「あっ」と下を向いたジュリアンに祖母がネックレスをわたし、街に出て上を向いてうきうきとした表情になっていく様子が見られる。サウザンブックスの PRIDE 叢書は、セクシュアル・マイノリティが誇り高く生きていくための本を出版している。裏絵には、高齢者のマーメイドを描き、LGBT だけでなく老若男女すべての人が自分に自由であってよいというメッセージ性がうかがえる。『くまのトーマスはおんなのこ』は、トーマスと名づけられたくまが「はなしたら きみとは もうともだちじゃなくなって しまうかも しれないよ」と伝え「わたしはじぶんらしく いたいの」「なまえもトーマスじゃなくてティリーがいいって おもってた」とおんなのこのくまだと友達のエロールに伝え、エロールはそれを受け入れると「きみって くまにとって さいこうの ともだちね」と言い、それまでと同じように遊ぶという話である。作者のジェシカ・ウォルトンはバイセクシュアルの女性であり、父親はトランスジェンダーであることから、家族の多様な在り方を伝える絵本が欲しいと考え創作したものである。くまのティリー（トーマス）がなかなか口に出せない悩みがゆえに悩み、勇気を出して伝え、ありのままを受け入れてもらえる自由を語っている。この絵本の訳者である安川は LGBT とそうでない人をつなぐ場づくりとして認定 NPO 法人グッド・エイジング・エールズの理事をしており、この絵本を通して多様な生き方や家族の在り方を認める社会づくりを考えている。これらの絵本は、主人公が傷つき、悩みながらも自分らしさを模索している様子を描いており、自分の考えを大切にすする勇気や声をあげる大切さを伝えている。

一方で、『ピンクはおとこのこのいろ』⁶¹、『ぼくのスカート』⁶²、『色とりどりのぼくのつめ』⁶³、『とりかえっこ はっぴょうかい』は、自分がすきなものがすきと言える自由を楽しむことを提案している。『ピンクはおとこのこのいろ』では、「ピンクは おとこのこが すきだな そして おんなのこも」から始まり、いろいろな色がおとこのこもおんなのこもすきで「それから どんないろも みんな すきなんだ おんなのこも おとこのこも」とし、色で男女を分けることが素敵ではないと伝えている。同じように、『色とりどりのぼくのつめ』は、マニキュアに夢中になっているベンを学校で男の子たちがからかい、ベンは悩んでしまうが、父親は自分もマニキュアを塗り、ベンを励ましていく。ベンの誕生日にはクラス全員が色とりどりのマニキュアをしてベンを出迎えるという話であり、『ピンクはおとこのこのいろ』同様に、好きな色はさまざまであってよいことを伝えるほか、マニキュアは女性がつけるものと限定されず、だれもが楽しんでよいことを伝えている。『男らしく、女らしくがいいの？～ジェンダー～』は、手芸が好きな男の子と野球が好きな女の子がそれぞれの悩みを打ち明ける話で、メッチャカとシッチャカというぬいぐるみとの対話の中で、「みんなが じぶんらしく いきられると いいね」と伝えている。『ぼくのスカート』はいつも裸のフレッドがクローゼットに入り、着たい服を探し、お母さんの服を着て、お化粧もして嬉しそうにしていることを、お母さんとお父さんが嬉しそうに見つめているというお話で、絵本の後ろのカバースリットに「あなたが、だいじ！」

と書かれている。LGBT をテーマとした絵本は海外の絵本の翻訳が中心となっているが、日本の絵本としては、『だかし屋のおっちゃん、おばちゃんなのか?』、『とりかえっこはっぴょうかい』が 2022 年に出版されている。『タンタンタンゴはパパふたり』(原著 “And Tango Makes Three “(2005 年)) が 2008 年に日本で出版されていることと比較すると、日本発の絵本がようやく登場したという状況にある。『だかし屋のおっちゃん、おばちゃんなのか?』は、だかし屋のおっちゃんだと思っていた人が近所の人から「はるこちゃん」と呼ばれていたことから、「おっちゃんは女なんか?」と思い切って尋ねてみた。おっちゃんは「そうや。おっちゃんは 女の子に 生まれたんや。でも、心は ずっと、男やねん。」と打ち明け、経緯を教えてくれた。その後、おっちゃんは「自分らしく 生きていくことが 大事やと 思う。みんなが そういうふうに 考える 世の中に して いかなきや あかんのと ちがうか?」と問いかけている。『とりかえっこ はっぴょうかい』は、先生によって男の子は野獣役、女の子はお姫様役と発表会の配役をされたが、タロちゃんはドレスが着たかったので、お姫様役のなつきちゃんと衣装の交換をすることになったところ、クラスみんながやりたい役をそれぞれ決めることになった。子どもたちが性差の決めつけをせずに、なりたい自分になることを選択するお話で、表紙と裏表紙の内側に最初に決められた配役一覧と子どもたちがやりたい役をそれぞれ決めた配役一覧があり、見比べてみると子どもの自己決定の様子がよくわかり、興味深い。

このように、絵本が子どもの権利、その延長上に人権の視界を拓き、「自分は自分でよい」、「わたしはわたしだ」と言うことができ、他者に対しても同じことを言うことができる社会のありようを伝えようとしている。また、「自分は自分でよい」と自己主張することから取り巻く社会が変化していく様子を描いており、子どもの意見表明が重要であることを示唆している。

さまざまな家族のありようについては、先ほど紹介した『タンタンタンゴはパパふたり』、『王さまと王さま』、『ランスとロットのさがしもの』、『ふたりママの家で』、『マチルダとふたりのパパ』などがある。

『タンタンタンゴはパパふたり』は、仲良しの雄のペンギンが卵を温めてひなをかえす話であり、訳者の尾辻かな子は日本で初めて同性愛を公言した議員である。『王さまと王さま』、『ランスとロットのさがしもの』の著者リンダ・ハーンは、家族の新しいあり方を提言している。リンダ・ハーンはオランダの絵本作家である。オランダは 2001 年に世界で初めて同性婚を法的に認めた国であり、同性同士のカップルとその子どもが法的に親子関係⁶⁴を結ぶ権利を保障している。子どもの幸せを中心としたときに、レインボーファミリー団体は「愛が家族を作る」とし、家族のありようは多様であるとしている。『王さまと王さま』、『ランスとロットのさがしもの』はオランダで出版された絵本で、世界各国で翻訳されている LGBT をテーマにした絵本である。『王さまと王さま』は王さまと王さまが結ばれるお話であり、『ランスとロットのさがしもの』は LGBT のテーマを一步進めて、子どもには安全で安心な環境が用意され、家族から愛情が注がれる必要があり、そのような家族はどの子どもにも必要であり、家族には多様な形があることを伝えている。子どもにとって、親の性的志向、性自認、身体的性の多様性は無関係であり、子どもにとって家族とは何か、家庭とは何かに関わり合いがないことを示している。

一方で、LGBT についてまだまだ理解がなされていない現実もまた絵本は描いており、

先ほど紹介した『せかいでさいしょにズボンをはいた女の子』や『ジュリアンはマーメイド』は、主人公が周りの言葉に傷ついたり、自分の思いに悩んだり葛藤する様子が描かれている。また、『ふたりママの家で』では、近所の人々とパーティーを楽しむ中で、ロックナー家のママに「いい気になってんじゃないよ」と恫喝する場面が描かれている。ふたりのママは「あの人は怖がっているだけよ。(略) わからないものが怖い。わたしたちのことがわからないのよ」と子どもに伝え、近所の人にはママ二人を一人ひとり抱きしめていく様子が描かれ、地域には理解し支援する人々もいれば、差別や偏見が未だ存在するという社会の状況を表している。この絵本の訳者である中川は、あとがきにおいて「もしも、まわりを比べて『うちの家族ちょっとヘン?』ととまどう子どもがいたら、この本が『ちがっていても大丈夫』と思える支えになればいいと思います」と記述している。

『マチルダとふたりのパパ』も LGBT の家庭を描いた絵本であるが、視点を変え、転校生のマチルダはパパが二人いるから 2 倍楽しい生活だろうと期待して、パールがマチルダの家を訪問するが自分の家と変わらない様子にがっかりし、「そうぞうしてたのちがうんだもん！ ぜんぜん ふつうで つまらなくて・・・うちのパパとママと かわらないんだよ！」と言っている。大人は足だけしか描かれておらず、そこから大人を想像するものとなっている。子どもにとって親はどこでも同じというイメージを抱かせている。それが悩むことなく受け入れられている。

乳幼児を対象とした絵本ではないが、『こんなのへんかな?』⁶⁵は、子どもの日常の中にある「男の子」「女の子」「女性」「男性」についておかしさに気づかせてくれる。特に「大人もへんだよ」と PTA 会合場面を描き、女性ばかりが参加しており、会長 1 名が男性であることに「へえ、どうしてなんだろう?」という子ども子がおおり、PTA がかつて「父兄会」と呼ばれていた時代があったことを発言することも描かれている⁶⁶。

このように、子どもの権利（障害、ジェンダー、LGBT など人権にかかわるテーマを含む）にかかわると紹介されている絵本について述べてきた。それぞれの時代背景と合わせて、これらのテーマの絵本が出版されており、最初は、海外の絵本を翻訳するという形で出版がされている。草谷⁶⁷は、1979 年に発刊された『スモールさんはおとうさん』⁶⁸では父親が家事育児をしていると指摘し、ジェンダー思想が日本よりも早くから発展していった海外の絵本を日本に導入することも意味があると主張しているように、新しい考えや価値観を絵本で伝える手法は、その思想や考えが普及し浸透している海外の絵本から取り入れることで、その思想や考えが適切な形で日本に導入されることになり、その後、日本に思想が普及される中で、日本における子どもの日常生活に落とし込まれた形で絵本が創作される状況にある。一方で、近年はテーマが設定されたシリーズで、子どもの権利が描かれる絵本も登場しており、メッセージ性がダイレクトである分、教育的意図が極めて強い絵本もある。絵本は、20 世紀以降、子どもの教育のためという位置づけによるところが大きく、その教育的効果は重要視されているが、一方で、絵本は、子どもたちが絵本の世界を楽しんだり、主人公になりきって喜怒哀楽を感じたり、純粹に楽しむものである。純粹に楽しんでいるからこそ、絵本の中で描かれる男女やパートナーとの関係、障害のある人や社会的弱者、民族の多文化性、子どもと大人の関係や位置づけの描き方について素直に受け止めることができる。反対に、ステレオタイプの関係性もまた素直に受け止めると言える。そのため、子どもたちに絵本を提供するときには、提供する側の大人の社会に対す

る意識が伴う必要がある。そこに、子どもに絵本を提供する大人の責任と重要性がある。メッセージ性が強ければ強いほど、子どもが楽しんでくれているかに配慮しながら読み聞かせを行うことが求められる。

そのような意味で、2022年に出版された、クレール・ガラロンの絵本『パパはどこ？』⁶⁹、『にゃっ！』⁷⁰は、普遍的に人権を理解することができるものとなっている。『パパはどこ？』は、子うさぎがパパを探す間に、一輪車に乗るおばあさんや洗濯をするおじいさん、花を摘むおじいさん、スポーツをするおばさんなどに出会いながら、パパを探していく話である。この絵本は、フランスで出版された絵本の翻訳であり、0歳児からの「ジェンダー平等」を学ぶ本とされている。しかし、ジェンダーをテーマとした他の絵本と異なり、「男らしさ、女らしさ」をテーマにしていなが、子うさぎが出会う人々それぞれがステレオタイプのジェンダー役割とは関係ないことをしているイラストから性別や年齢への固定観念が無くなされている。同様に、『にゃっ！』も0歳から学べる「同意」の絵本で、猫にちょっかいを出す子どもが猫の気持ちを尊重しながら「これやってもいい？」と問いかけ、相手が意思を持つ独立した個であることを示し、敬意と同意をもって接することを理解していく。この絵本も、ジェンダーに関する直接的な内容は含まれていないが、性的同意やジェンダー平等をリズムカルな問いかけで学んでいくことができる。これらの絵本のように、人権について配慮されながらも、子どもの日常を描いた絵本が数多く出版されることが、人権意識を当たり前のこととして受けとめる（受け入れる）社会の形成につながると考える。

注および引用文献

- 1 近年は、「LGBTQ」あるいは「LGBTQ+」などの用語を用いられることも増えてきている。ここでは、2023年に施行された「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」の略称を「LGBT法」としていることから、この論文においては「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性」を指す言葉として「LGBT」を用いる。
- 2 公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン（2021）「3万人アンケートから見る子どもの権利に関する意識」
- 3 認定NPO法人CAPセンター・JAPANが行っている。子どもの権利を基盤にした予防教育プログラムであり、子どもの権利が侵害される場面についてロールプレイを行い、対応方法を学ぶものである。2022年度までに593万人（子ども約372万人、大人約221万人）以上がプログラムに参加しているが、すべての学校で実施されているわけではない。
- 4 松本猛編（2015）、『絵本学講座3 絵本社会』、朝倉書店、p i
- 5 松井直（1981）、『わたしの絵本論』、国土社、p183
- 6 生駒幸子（2020）、「2. 絵本」、川勝泰介（2020）『よくわかる児童文化』、ミネルヴァ書房、p101
- 7 絵本ナビ（2023）、URL：<https://www.ehonnabi.net/advancedsearch.asp#gsc.tab=0>
- 8 Pictbook（2023）、URL：<https://pictbook.info/>
- 9 子どもの本、URL：<https://www.kodomo.gr.jp/>
- 10 おのきがく（1970）、『かたあしだちょうのエルフ』、ポプラ社
- 11 シェル・シルヴァスタイン著／倉橋由美子訳（1977）、『ぼくを探しに』、講談社

- 12 デイビッド・マッキー著／安西徹雄訳（1978），『ぞうのエルマー』，アリス館
- 13 シェル・シルヴァスタイン（1982），『続 ぼくを探しに ビッグ・オーとの出会い』，
講談社
- 14 フレディ・ブルーム，マイケル・チャールトン（1979），『ぼく耳がきこえないんだ』，
偕成社
- 15 トーマス・ベリイマン著／ビヤネール多美子訳（1978），『だれがわたしたちをわかっ
てくれるの』偕成社
- 16 植松要作（1980），『ぎざみみのうさぎ』，ポプラ社
- 17 たばたせいいち（1985），『さっちゃんのまほうのて』，偕成社
- 18 梁 敏子，手島 悠介（1985），『ママもおつとめ』，ほるぷ出版
- 19 沼野正子（1978），『おかあさんはしごとちゅう』，福音館書店
- 20 三木たかひろ（1990），『お母さんなんでや』，学陽書房
- 21 平和を作ろう！絵本作家たちのアクション（1989），『世界中の子どもたちが 103』，講
談社
- 22 名取弘文編（1996），『子どものけんり「子どもの権利条約」子ども語訳』，佑学社
- 23 川名はつ子監修（2017），『はじめまして、子どもの権利条約』，東海教育研究所
- 24 シェーナ出版編，遠藤ゆかり訳（2018），『ビジュアル版 子どもの権利宣言』，創元
社
- 25 東菜奈／訳（2018），『世界人権宣言の絵本 みんなたいせつ』，岩崎書店
- 26 アラン・セール，オレリア・フロンティ（2020），『子どもの権利ってなあに？』，解
放出版社
- 27 レイフ・クリスチャンの絵本として、『ともだち』『あなたがすき』『しあわせ』
（1995），『ひとりぼっち』『うれしい』『わたしのせいじゃないーせきにんについて
ー』（1996），『たんじょうびーゆたかな国とまずしい国』『たいせつなあなた』『じぶ
ん』『ゆうき』『てがみをください』『あこがれ』（1997），『たいせつなとき』『おんな
のこだから』（1999），『だいすきなあなたへ』（2001）が日本において出版されてい
る。
- 28 デブラ・フレイジャー（1999），『あなたがうまれたひ』，福音館書店
- 29 アン・ラン（1999），『ぼくはいろいろしてるよ』，福音館書店
- 30 エリック・バトゥ（2000），『いつだってともだち』，講談社
- 31 ブライアン・モーセズ（1998），『心のなやみに こたえます第 2 期』（全 8 巻），評論
社
- 32 ベディ・ボガホールド（1999），『とにかくさけんでにげるんだ』，岩崎書店
- 33 浜田桂子（2002），『さっちゃんとなっちゃん』，教育画劇
- 34 谷川俊太郎（2002），『ともだち』，玉川大学出版部
- 35 内田麟太郎のともだちシリーズの絵本としては、『ともだちや』（1998），『ともだち
くるかな』（1999），『あしたもともだち』（2000），『ごめんねともだち』（2001），
『ありがとうともだち』（2001），『ともだちひきとりや』（2002），『ありがとうとも
だち』（2003），『あいつもともだち』（2004），『ともだちおまじない』（2006），『き
になるともだち』（2008），『ともだちごっこ』（2010），『よろしくともだち』（2012）
がある。
- 36 草谷桂子（2003），『ジェンダーフリーってなあに？』（全 3 巻），大月書店
『プレゼントはたからもの』『ぼくはよわむし』『おきやくさんはいませんか？』
- 37 S. マクラブラットニイ（2004），『パパとママのたからもの』，評論社
- 38 アンソニー・ブラウン（2005），『おんぶはこりごり』，平凡社
- 39 内閣府（2004），『男女共同参画社会に関する世論調査』

- 40 天童睦子編 (2016), 『育児言説の社会学—家族・ジェンダー・再生産』, 世界思想社, p130
- 41 NPO 法人 SEAN (2003), 報告書「絵本 100 冊読んで見えてきたもの」
- 42 Anthony Browne (1986), “PIGGYBOOK” Walker Books
- 43 福岡貞子・磯沢淳子編著 (2009), 『保育者と学生・親のための乳児の絵本・保育課題絵本ガイド』, ミネルヴァ書房
- 44 福岡貞子・磯沢淳子編著 (2009), 『保育者と学生・親のための乳児の絵本・保育課題絵本ガイド』, ミネルヴァ書房
- 45 佐々木宏子, 「私の勧める課題絵本 『おんぶはこりごり』」, 福岡貞子・磯沢淳子編著 (2009), 『保育者と学生・親のための乳児の絵本・保育課題絵本ガイド』, ミネルヴァ書房, p31
- 46 アンソニー・ブラウン著／藤本朝巳訳 (2005), 『おんぶはこりごり』, 平凡社
- 47 ジャスティン・リチャードソン (2008), 『タンタンタンゴはパパふたり』, ポット出版
- 48 ナタリー・オンス (2010), 『ピンクがすきってきめないで』, 講談社
- 49 リンダ・ハーン (2015), 『王さまと王さま』, ポット出版
- 50 ジェシカ・ウォルトン (2016), 『くまのトーマスはおんなのこ』, ポット出版
- 51 エミール・シャズラン (2019), 『ふたりのパパとヴァイオレット』, ポット出版
- 52 メル・エリオット (2019), 『マチルダとふたりのパパ』, 岩崎書店
- 53 リンダ・ハーン (2019), 『ランスとロットのさがしもの』, ポット出版
- 54 パトリシア・ポラッコ著, 中川亜紀子訳 (2018), 『ふたりママの家で』, サウザンブックス社
- 55 ジェシカ・ウォルトン著／川村安紗子訳 (2016), 『くまのトーマスはおんなのこ』, ポット出版プラス
- 56 キース・ネグレー (2020), 『せかいでさいしょにズボンをはいた女の子』, 光村教育図書
- 57 森川かりん (2022), 『とりかえっこ はっぴょうかい』, 汐文社
- 58 多屋光孫 (2022), 『だがし屋のおっちゃんはおばちゃんなのか?』, 汐文社
- 59 遠見才希子 (2022), 『性とからだの絵本』シリーズ『うみとりくのからだのはなし』『おとなになるっていうこと』, 童心社
- 60 ジェシカ・ラブ著／横山和江訳 (2018), 『ジュリアンはマーメイド』, サウザンブックス社
- 61 ロブ パールマン著／ロバート キャンベル訳 (2021), 『ピンクはおとこのこのいろ』, KADOKAWA
- 62 ピーター・ブラン著／日高康晴監修・訳 (2023), 『ぼくのスカート』, 小学館
- 63 アリシア・アコスタ著, ルイス・アマヴィスカ著, ガスティ絵／石井睦美訳 (2022), 『色とりどりのぼくのつめ』, 光村教育図書
- 64 これは「レインボーファミリー (にじいろかぞく)」という。
- 65 村瀬幸浩, 高橋由為子 (2001), 『ジェンダー・フリーの絵本①こんなのへんかな?』, 大月書店
- 66 同上, p27-28
- 67 草谷桂子, 「『人権とジェンダー』の視点で絵本を見る」, 松本猛編 (2015), 『絵本学講座 3 絵本と社会』, 朝倉書店, p73
- 68 ロイス・レンスキー (1979), 『スモールさんはおとうさん』, 福音館書店
- 69 クレール・ガラロン著／依布サラサ訳 (2022), 『パパはどこ?』, アジュマ

70 クレール・ガラロン著／一三十一訳（2022）『にやっ！』, アジュマ

参考文献

- (1) 永田桂子（2007）『よい「絵本」とはどんなもの？』チャイルド
- (2) 松居直（2008）『松居直のすすめる50の絵本』教文館
- (3) 徳永満里（2009）『赤ちゃんにどんな絵本を読もうかなー乳児保育の中の絵本の役割』かもがわ出版
- (4) 福岡貞子・磯沢淳子編著（2009）『保育者と学生・親のための乳児の絵本・保育課題絵本ガイド』ミネルヴァ書房
- (5) 末盛千枝子（2010）『人生に大切なことはすべて絵本から教わった』北川フラム
- (6) むのたけじ（2013）『絵本とジャーナリズム』NPO 法人「絵本で子育て」センター
- (7) 生田美秋,石井光恵,藤本朝巳編著『ベーシック絵本入門』ミネルヴァ書房
- (8) 青木文美編（2016）『絵本から「子ども福祉」を考える』春風社
- (9) 瀧薫（2018）『新版 保育と絵本～発達の道すじにそった絵本の選び方』エイデル研究所
- (10) 飯田一史（2020）『いま、子どもの本が売れる理由』筑摩書房
- (11) 中村敏子（2021）『女性差別はどう作られてきたか』集英社
- (12) 伊集守直,光橋翠訳（2021）『幼児から民主主義ースウェーデンの保育実践から学ぶ』新評論
- (13) 草谷桂子（2022）『レインボーブックガイド 多様な性と生の絵本』子どもの未来社
- (14) 子ども図書館司書+NPO 法人アーダコーダ（2023）『子どもたちが考え、話し合うための絵本ガイドブック』アルパカ合同会社

田谷 幸子（たや さちこ） 東京通信大学 人間福祉学部 准教授